

易から考えた生き方の一考察

高 木 工

はじめに

成功する人間は「運・鈍・根」のある人間であると言われている。そのことを砕いて言えば、運が良く・一つのことをバカになって行い・根気強く出来るまで行うことを言う。その運とは何か？ 人間は、大安などの日時を選んで行事を決める。即ち、結婚式は大安にするとか、葬式は友引を除くとか縁起を担いで日時を決めて重要な行事を行っている。また人間は、方位を選んで家を建てたり、旅行等の行き先を決めたりもしている。何故人間は、このようなことを行っているのだろうか？ 少しでも運命を良くする生き方をするために行っているのだろうか。この運命について易経の教えを基にして考えてみた。易経は中国に古くから伝わる宇宙・人間の实体、本質、創造、変化を探求した「学問」であり、統計学的な要素も含んでおり生き方の参考になるばかりか、運命を切り開く上でも有効な書物である。運命を宿命と捕らえず、立命として捕らえることで生き方を考えてみた。そのことを、因果応報の法則からも付け加えて検証してみた。

1. 易経の視点で運命を考える

易は、「易経」繫辞上伝に「法象は天地より大なることなく」とか「易は天地と準う。故に能く天地の道と弥綸す。仰いでもって天文を觀、附してもって地理を察す、この故に幽明の故を知る。始めて原ね終わりに反る、故に生死の説を知る」とか「夫れ易は広し大なり。もって遠きを言えば禦らず、もっ

て邇ちかきを言えば静かにして正しく、もって天地の間を言えば備わる」また繫辞下伝に「易の書たるや、広大ことごと悉く備わる。天道あり、人道あり、地道あり、三材を兼ねてこれを両ふたつにす。故に六なり。六とは它たにあらざるなり、三材の道なり」等に記されている通り、宇宙・人間の实体、本質、創造、変化を探究した「学問」として発展し、人間の人生、生命などに関する維新の研究、維新の学問として発展定着した。易の六義は、一つは変わること、二つは変わらないこと、三つは変化の原理・原則を探求し、人間が意識的・自主的・積極的に変化していくことを化成と言って、人間が創造主となって創造すること、四つは神秘的なこと、五つは終わることなく無限に進行すること、六つは足らざるを補い誤りを正すこと、すなわち修めることの六点である。中でも一から三までが、易の本質を良く表していると言える。

古来中国のみならず、わが国においても易学は、宇宙世界根元の原理として絶対的な権威を保って来た。今これを明らかにすることは、無意味なことではあるまい。易の思想や原理は、以下の通りである。

陰陽相対の理法：陰は籠る、結ぶという意味があり、陽は表立つ、分かれる意味がある。この原理を人格で表現してみれば、陰は徳（成長の原動力、結びの力）、陽は才幹、知能であり徳性と才幹知能が相まっている。そのことは、才徳兼備の人が良いと言われていることにも現れている。欲望は陽、内省は陰であり、内省のない欲望は邪欲である。陰陽二つがそろうことで生成発展が出来るのである。陰陽相対についても、相対立すると同時に相待つと言うこと、すなわち陰は陽を待って初めて中していく、進歩向上していくものである。

中の理論：人間を含む造化の世界は、進歩向上してやまない。現実には万物の相対する世界であると同時に、総合統一されて限りなく変化していく、あるいは進歩向上と観察することもできる限りない造化が進行していくことを説明しているのが中の理論である。「中する」とは、現実の矛盾を統一してさらに新しくクリエートしていく働きを言う。

五行思想：五行とは、それを形で表し、象徴的に言うと木、火、土、金、水である。相生とは、木が火を生じ、火が土を生じ、土が金を生じ、金が水を生じ、水が木を生じる関係を言う。相生が良い関係を言う。逆に相剋とは、木は土を剋し、土は水を剋し、水は火を剋し、火は金を剋し、金は木を剋す

る関係を言う。相生のそこなう関係、良くない関係を言う。

六十四卦と配列の意義：天地の創造進化である万物生成化育の原型を六十四の種類に分け、それを上経と下経のふたつにして、上経に三十卦、下経に三十四卦をおき、乾坤の二卦より始めて、既済、未済に終わる六十四卦に配列されている。森羅万象を六十四卦で表現している。

以上簡単に易の原理について触れてみた。今の卦（局面）に対して易の原理に添って生きることで、運命が開けると言われている。

*これについて「当たるも八卦、当たらずも八卦、などと言って、無視する傾向も少なくはないが、誰でもより良い生き方を探ろうとするのは、万人共通の心情である、とらわれてはいけなさが考えることは必要である。筆者はこの観点に立って論を進めたいと思う。

2. 因果応報の法則から運命を考える

どんな原因を積むことでどんな結果が出るのであろうか？ 原因と結果の関係で考えてみる。

アレンは、「思い」がすべてを決めると言っている。そのことを「心は、創造の達人です。そして、私たちは心であり、思いと言う道具を用いて自分の人生を形づくり、そのなかで、さまざまな喜びを、また悲しみを、みずから生み出しています。私たちは心の中で考えたとおりの人間になります。私たちを取り巻く環境は、真の私たち自身を映し出す鏡にほかなりません。」と語っている。原因は「思い」であると言っている。

別の言い方をすれば、「宇宙の心」（阿頼耶識*）に運命を開く思いが入ることである。「宇宙の心」とは全人類に共通の潜在意識のことである。謝は、個人の潜在意識（第七識）の次にある全人類に共通の潜在意識（第八識）を

* 阿頼耶識とは、アラヤシキと読む仏語で、対象を識別し認識する作用のあるものを、八つまたは九つ立てて、八識または九識という、そのうちの第八識を言う。宇宙の万有を保って失わず、万有が展開する際の基本であり万有を収蔵しているもの（日本国語大辞典）。

唯識論で説く八識の第八、宇宙万有の展開の根源とされる心の主体。万有を保って失はないところから無没識、万有を蔵するところから蔵識、万有を発生の子を蔵するところから種子識ともいわれる（大辞泉）。

「宇宙の心」(阿頼耶識)と説明している。無能は、阿頼耶識を「万物を造り出した根元的潜在能力」、あるいは「貯蔵しておく意識」と説明している。バトラは、「人間は、宇宙意識と結びついている」と主張する。一方天野は、自らの生気体を宇宙の生気体に直結させた生き方をすることができるとし、そのことを自然科学、精神科学の垣根を取り払われた理論で証明している。これは各氏の論であるが、仏教の唯識論の説く総括的な論といっても良いし、個々の解釈と考えても良い。

現在でもユングやフロイトなどに始まる無意識の分析は、例えばハイデガーなどの哲学にも影響を与えたとされる。そうした西洋の方法以前に「意識」を支配する「意識」としての阿頼耶識についての考察は唯識学において見られ、広く我が国の文化、芸術(例えば世阿弥の能学論、あるいは「わび」「さび」論等)にも影響を与えている。因みて禅宗における究極の目的は、この阿頼耶識に目覚めることと考えられる。それ故「運」の一言は、掘り下げれば根が深いものである。例えば、空海は第十識まで、日蓮は九識まで立てる。その論は広大無辺であり、ここでは直接引用を避けるが古来より、個々の生命系と宇宙の体系との合一を用いる理論は存続し続けているのである。したがって筆者は、運命を開く原因作りには、「宇宙の心」に運命を良くする情報・言葉・イメージ等を満たしておくことであると考ええる。

次に、運命の因果関係についてどのような因果応報の法則が運命観にあてはめられるかを考えてみる。運命を良くする原因と結果の関係は、何が原因で結果にどの程度の影響を与えるものなのか。その原因は、先祖運(ゲノムを含む)と生まれてからの思念と行動である。その結果は、現在の状況と未来の状況の中に現れる。未来については、子孫にまで及ぶものと言われている。世の中の森羅万象をどの様に見て判断し行動に移すかは心である。その心が運命の良くなる現象に反応することで業(カルマ)の積み重ねが出来る。子孫にも影響が及ぶのは、親の生き方に影響を受けるからである。影響を受ける度合いについては、一生の間では時間差はあったとしても、未来の子孫の分まで含めて原因と結果の関係は同じになるはずである。原因の積み重ねにふさわしい結果が現れることになるからである。中でも原因に強く影響を与える要因との出会いは、先祖運以外には、師匠運と逆境への試練が有ると言われている。尊敬できる人から受ける影響は大きいし、逆境の時の現象の

受け止め方を有難く前向きに受け止めることで、運命のよくなる言動につながるからである。このために、仏教では、八正道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）を修行の基本に置いている。そのように「俱舍論」を主とする仏典は説く。結論として言えることは、良い原因を積み重ねることに尽きる。例えそれがどのような生命の連鎖関係にあっても、生命の存在自体は平等なのだから。宇宙それ自体の中にある生命体系そのものに不平等要素が存在すると考えるのは私論の枠外にある。

3. 運命を立命と捕らえる生き方

運命は、生まれた時に決まっているとの考えかたもある。しかし、これまでの論から導かれる筆者の考え方は、「運命は命の全称であり、運命の中に宿命と立命がある」と言う立場に立って論じることができる。

運命の中にある宿命と立命との違いについては、次の通りである。

人間の存在、生活は、絶対的なものでありその意味を命めいと言う。また、動いてやまないため、運命と言う。この命の中に存する理法、真理を数と言う。易では、命の中に含まれている深い理法、因果関係を明らかにして宿命に陥ることなく、常に創造的、クリエイティブにすることを立命と言う。

宿命の、宿の字は「やど」という字であり「とまる」と言う意味である。人間の母の体から出て、ここの声をあげた瞬間に一生のことが決まっており、その後の人生、すなわち次第に成人し、花が咲き、実を結ぶ、あるいは嵐がやってまとう出来ず、途中で滅んでいくなどが、決まっていると考えるのが宿命である。

これに対し、立命とは、本当の運命というものは運命の法則、理法を知って、それに従って開拓していくもの、自主創造していくべきであるとの考え方に立つのである。したがって生き方しだいで運命は、開けていく・変わっていくものであるとの認識に立つ考えをする。易の六義の内の三つ目の義に言われている、人間が創造主となって創造することに該当する考え方である。

運命を宿命と立命と二つの見方をした場合、生き方として取るべき道は、立命へ向けて運命を運ぶことが出来るように自己の未来を創造して行くことにつきると筆者は考える。言葉をかえれば、真理を求めて生きる前向き・積

極的生き方が、立命のためには求められると言える。

4. 立命の生き方

立命の考え方を基にして、まず易の教えから考えてみる。その上で普遍化して応用できる考え方について筆者の意見を述べてみたい。

易の考えかたは、1で基本原理について記載した通り、維新（進化を続ける）の学問である。森羅万象を六十四卦（局面）で説明をして、現在の局面にどう対応するのが良いのかの判断材料にすることが出来るものである。乾・坤から始まり、既済・未済で終わる配列になっている。かつ、どの卦の場合も対応の仕方だけで変化の方法が異なり、違う結果になる。また終わりは、新たな始まりでもある。そして、無限に循環し生成発展を続けることが出来る考えが入っている。

乾坤の二文字に基本的な考えかたが入っており、まずこの卦について述べてみる。「乾」の卦は、すべて陽であり、元亨利貞で説明される。元の字は、自然と生物とを要約した文字である。時間的にははじめ、立体的にはもと、部分に対する全体、万物を創造してこれを育成していく大きな力、すなわち大極である。亨は負けないでどこまでも進化していく意味である。利は、働き、作用、その生命力、行為力が躍動する象である。貞は、何事があっても一貫して変わることのない不変性を持つ意味である。別の言葉では、天行健なり、君子自彊息まず。すなわち、常に新たに、実践研究、解明して、自然が春夏秋冬渋りなく、造化を営むように、われわれはその生涯を常に新たに創造していくことを「乾」と説明している。

「坤」の卦は、すべて陰であり、乾が天の対し地である。要約する言葉では、厚德載物である。徳を厚くし、物を載す。これは乾の徳、すなわち天地創造のエネルギー、力を受けて、万物を生成し、これを包容することである。

乾坤の二卦で、天地万物の生成化育の実体と原則、本質が要約されており易経の根本精神がつかめるものである。これは一見不確実なものに見えるであろうが、この不確実性の中に不易を求める方法論がこの乾坤の二卦にこめられていると考えると、人生に対し別の考え方が成立する。

易経の考え方を取り入れて、今日的言葉で表現すれば、以下のようなになる。

易から考えた生き方の一考察

陰陽相対の理法の考え方を取り入れれば、才能を伸ばせば伸ばすほどに、徳を積むことが求められる。木で言えば、幹や葉が茂れば茂るほど、根を張る必要があることに例えられる。

五行思想の考え方を取り入れれば、組み合わせを上手に使うことの大切さが理解できる。人事配置やチーム作りなどに、この考え方が適用できる。

中の理論を活用すると、矛盾するもの等も抱え統一して進化をするために、待つ時間が必要になる。根気良く待つ力・忍耐力が必要になる。

このような考え方を取り入れながら、現代的に普遍化して考えてみると、筆者は自分なりに以下の項目が生き方として大切であると考えた。言葉を変えれば、良い原因作りをするための生き方とも言える。

- (1) 徳を積む。このことは、成長を支える元になる。徳の心は、恕・仁・愛・思いやり・感謝等で表現される。この心を持って実践行動を行うことで、徳を積むことになる。そのことにより才能が生かされ、かつ存続できる。
- (2) プラス思考で生きる。いずれの局面でも、易は生成発展する思想がベースにある。易の基本思想は、維新の学問である。最悪の局面でも、次に良くなる局面であると考えれば、道は開ける。
- (3) 忍耐力を持って生きる。生きる過程には、色々の局面が存在する。思い通りに運ばない局面の時、変化するまで待つ力が必要になる。

む す び

以上述べたことは、別に易や因果応報の法則に頼らなくても、一つの倫理観として成立し得ると考えられるであろう。されど、よくその根元を辿ると実はこうした徳目は、ただ「在った」のでもなく「在る」のでもなく、古来さまざまな易学や仏教の因果観の過程がこのように集約されたものと言うことが出来る。従って「運」は極めて東洋的であると同時にどうしてこのような思索過程が実を結んだのか、現今の西洋のおいても注目するところになっている。そして運命を良くする生き方は、立命の生き方をすることに尽きる。このことは、因果応報の法則から考えても同じ結果に到達する。以下筆者は、先人の知恵に従って行えば、次の生き方が大切であると自分に言い聞かせて

いる。

- (1) 徳を積んで生きる。このことは、木に喩えれば根を張ることに当たる。因果の関係では、心を鍛え、心を広く大きく深くすることに当たる。そのことの具体化としては、次のようなことが言える。生かされていることに感謝し、人には恕の心で接して、利他の心で出来ることを与え続ける生き方をする。誰もみていなくても、お天道様は見ていると言われていたことの実行である。

感謝は、「ありがとう」の言葉を心から思い活用することである。感謝することで素直な心になれるし、また、脳にとって最高のプラス情報も頂けるからである。

利他の心（思いやりの心）は、奉仕の心を持って行動することである。このことは、たらいの水を前に押し出す行為に似ており、押せば押すほど、手元に水が返ってくる原理に同じと言える。

坤には、省く意味もある。このことの実行は、実行計画を重点化して不必要なものを省くのと併せ、過去を忘れることである。特にどうにもならないことは、忘れることが良いのである。但し、忘れてはならないことは、お世話になった恩は大事に残すことである。

- (2) プラス思考で生きる。世の中は、常に生成発展している事実をしっかり把握して、どんな局面もよくなるためのステップであると考ええる。

自分の想念を徹底的にプラスにすることであり、楽天主義者になることとも言える。

因果応報の法則からも、阿頼耶識にプラス思考のできる要因を一杯にしておくことである。行為は、その思いにしたがって現れるからである。その思いは、将来の自分のイメージや目標を持って生きることとも言える。また、イメージや目標のレベルを高めることが大切になる。レベルの高さとしては、宇宙の心である真（誠）・善（愛）・美（調和）の心に目標が合一することが最高になる。

- (3) 忍耐力を持って生きる。自然の四季と同じく、運命も巡っているので、局面によると耐えて待つことが必要になる。良い原因を積み重ねていても、結果が出るまでには一定の時間が必要になるからと考える。「鳴くまで待とうホトトギス」の心境も必要となる。「継続は力なり」の言葉

易から考えた生き方の一考察

の通り、目標達成まで根気強く一つのことを継続し続けることが含まれる。

以上の3点は、一般的にもよく言われている事柄ばかりであるが、地味に見えるこのことの積み重ねが、生き方としては立命につながる生き方である、と筆者は結論つけた。

参考文献

- 高田真治・後藤基巳訳、「易経」上下，岩波文庫，p. 592, 1993.
ジェームス・アレン（坂本貢一訳）「原因」と「結果」の法則，サンマーク出版，p. 94, 2003.
謝世輝，運命は，決然たる意志とともに前進する者にだけ，その扉を開く！ 致知，p. 139 (48-58)，2002，6月（通巻323号）.
無能唱元，「君の靈格を高めよ」，竹井出版，p. 239, 1986.
ラビ・バトラ，「宇宙意識と波動」，PHP 研究所，p. 213, 1995.
天野 仁，「宇宙の存在に癒される生き方」，徳間書店，p. 298, 1997.
安岡正篤，「易と人生哲学」竹井出版，p. 236, 1988.